人　権　尊　重　文　集

# 春を呼ぼう

２０１７年1月

第 12 集

新　　宮　　市

新宮市教育委員会

新宮市人権尊重委員会

# はじめに

新宮市教育委員会　教育長　楠本秀一

平成二十八年は人権に係る二つの法が施行されました。四月一日に施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」、十二月十六日に公布・施行された「部落差別の解消の推進に関する法律」です。

前者は、全ての国民が障がいの有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現を目指し、後者は、部落差別は許されないものであるとの共通認識のもと、その解消に対する国民一人一人の理解を深めることにより差別のない社会を目指しています。どちらも、これまでの人権教育で大切にされてきたものであり、日本国憲法における基本的人権を尊重するものです。二つの法施行を受け、人権に対する認識が更に進み、人と人が互いに認め合い、尊重し合いながら生活できる社会になることを願っています。

さて、十一月の「差別をなくする強調月間」や十二月四日から十日までの「人権週間」の取り組みを終え、この度、平成二十八年度の人権尊重文集「春を呼ぼう」を発刊することができました。

児童生徒が人権に関する作文を書くことは、人権についてこれまで以上に考えを深めるための良い機会です。友達の人権作文を読んだり、発表を聞いたりすることが人権に対する考え方や見方を広げ、同時に、友達に対する理解の深まりや新しい認識を生みだすきっかけとなります。

今回の文集でも各校における熱心な取り組みの結果、素晴らしい作品が集まりました。家族や友達、飼っているペットのことなど身近な問題に始まり、いじめについての思いや命・平和の大切さなど、発達段階に応じた様々な人権問題が幅広いテーマとして表現されています。丁寧に書かれた作文は子どもたちそれぞれの他人を思いやる気持ちや優しさにあふれ、より豊かな感性で人権について鋭く見つめ、考えた姿が読み取れます。

本文集を児童生徒の皆さんをはじめ、より多くの方々に読んでいただき、人権尊重の輪がさらに大きく広がることを願います。

最後になりますが、この文集を作成するにあたって、御尽力いただいた関係者の皆さんの御協力に深く感謝すると共に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

もくじ　『春を呼ぼう』　第12集


★小学生の部★

わたしのかぞく　熊野川小学校一年　1
いつでもなかよし　三輪崎小学校一年　1
ねこのジュンちゃん　高　田小学校一年　2
がんばったこと　神　倉小学校一年　2
だいじなかぞく　王子ヶ浜小学校一年　3
命の誕生　三輪崎小学校三年　3
元気にしてくれた友だち　神　倉小学校三年　4
わたしの弟　熊野川小学校四年　4
ごめんね「イチ」　高　田小学校四年　5
生きていること　王子ヶ浜小学校四年　6
うれしかった　三輪崎小学校五年　7
言葉の大切さ　熊野川小学校六年　7
「自然」と生きる　高　田小学校六年　8
命を大切に　神　倉小学校六年　9
誰もが一生懸命　王子ヶ浜小学校六年　10

はじめに　新宮市教育委員会教育長　楠　本　秀　一

★中学生の部★

言葉　緑　丘中学校一年　12
いじめ　城　南中学校一年　12
周りの人を大切に　熊野川中学校一年　14
子どもの人権　光　洋中学校一年　15
8月6日　緑　丘中学校二年　16
奇跡　城　南中学校二年　16
アンプティサッカー　近畿大学附属新宮中学校二年　17
いじめで亡くなる人を救いたい　熊野川中学校二年　18
プライバシーと人権　高　田中学校二年　19
祖父の初盆で考えたこと　光　洋中学校二年　20
いじめの解決策　近畿大学附属新宮中学校二年　21
虐待された子供の未来　緑　丘中学校三年　21
愛のあり方　城　南中学校三年　22
「平和」を感じる　熊野川中学校三年　23
相模原殺傷事件で思ったこと　光　洋中学校三年　24

## 小学生の部

### わたしのかぞく

熊野川小学校一年

わたしのかぞくは、おとうさんとおかあさんとおねえちゃんとおとうとです。

おとうさんは、あそんでくれます。おとうともよろこびます。でも、おとうさんはすぐにつかれます。おとうとが、また、おとうさんに、

「だっこだっこ。」

といいます。そして、おとうさんは、おとうとに、

「もう、むり。」

といいます。だから、おとうとがおこります。

おかあさんは、わたしがいえにかえったら、わたしに学校のことをききます。そして、おとうとのめんどうをみて、すぐにばんごはんをつくりはじめます。おかあさんは、いっしょうけんめいごはんをつくってくれます。

おねえちゃんは、いつもテレビを見ています。ばんごはんができたら、すぐに、ニュースにかえます。そして、ばんごはんをたべます。

おとうとのがくは、二さいです。がくは、おふろからあがったら、みかんをたべます。みかんがすきです。がくは、くすりをのむとき、ぐずります。ふくをきるときもなきます。おとうさんに、

「ジュースをちょうだい。」

といいます。おとうさんは、やさしいから、ジュースをあげます。がくは、このごろＤＳをほしがるから、おねえちゃんにおこられます。がくは、おかあさんのけいたいでようかいウォッチを見ます。そして、おかあさんが、ばんごはんをつくえにおくときに、けいたいをとりあげるので、がくはなきます。そして、がくは、ばんごはんをたべなくなります。

おかあさんは、

「おにさんくるで。」

と、がくにいったら、ごはんをたべます。みんながごはんをたべおわったら、がくが、ひとりであそびます。そして、おとうさんが、

「おふろができたよ。」

といいます。がくは、すぐにおふろにいきます。おとうさんとがくとわたしで、おふろにはいります。がくは、おふろのおもちゃであそびます。がくが、おとうさんとわたしのハブラシをとってくれます。すごいとおもいます。

わたしは、かぞくが大すきです。

### いつでもなかよし

三輪崎小学校一年

ぼくには、ほいくしょからずっとなかよしのともだちがいます。たいせいくんです。

たいせいくんと、オセロやトランプをしたり、ブランコとかデッキとかであそんだりしています。てつぼうでもあそびました。

まえに、たいせいくんと、一りんしゃをしました。つかえる一りんしゃをどうじに見つけて、とりあいをしてけんかになったの

がかなしかったです。ぼくは、
「かわりばんこにつかおう。」
といったけど、たいせいくんが、
「ぼくのほうがさきやったんや。」
と、どうじだったのにいいました。ぼくは、
「じゃあ、じゃんけんにしてきめよう。」
といったけど、たいせいくんは、
「いやや。」
といいました。ぼくは、もう一どいいました。
「じゃんけんしよう。」
たいせいくんは、
「いいよ。」
といってくれました。なかなおりができました。
たいせいくんとあそぶと、たのしいです。けんかをするときもあるけれど、いつもなかなおりをしてあそべるから、うれしいです。
これからも、ずっとなかよしでいたいです。

## ねこのジュンちゃん

高田小学校一年

わたしのいえには、ねこのジュンがいます。
ジュンはくろだから、おばけごっこをするとき見えなくてやっかいだけど、大すきです。ジュンはかんでくるけど、かわいいから大すきです。ジュンは、月がまん月のときそとにいっちゃうけど、大すきです。ジュンは、いつもかえってくると、ないてあまえてきます。
ジュンが、どっかにいったときがありました。そのとき、わたしは、かなしかったけど、かえってきたとき、げんきだったから、うれしかったです。
ジュンちゃんへ
いつもいっしょにねてくれてありがとう。これからも、いっしょにいようね。

## がんばったこと

神倉小学校一年

なつ休みに、へんとうせんのしゅじゅつをしました。
わたしは、小さいときから、よくのどにあるへんとうせんがはれました。はれると、たかいねつがなん日も出ました。ねつが出たら、しんどかったです。おかあさんとおとうさんは、
「ずうっとこんなことがつづいたら、かわいそうや。ねるのもまい日くるしそうや。」
といつもしんぱいしてくれていました。
おいしゃさんが、
「なつ休みにしゅじゅつするか。」
といいました。わたしは、「がんばろう。」とおもいました。
しゅじゅつの日、わたしは、「だいじょうぶかな。」とおもったけど、おかあさんがそばでいてくれたので、がんばりました。
しゅじゅつがおわって目がさめると、おへやにいました。おかあさんが、
「ようがんばったね。」

といってくれました。
へんとうせんのしゅじゅつをしてから、かぜをひきにくくなりました。ねているときもくるしそうにしていないよ、とおかあさんがいってくれます。うれしいです。
しゅじゅつをがんばってよかったです。
おかあさん、おとうさん、おばあちゃん、おじいちゃん、おいしゃさん、かんごしさん、おうえんしてくれてありがとう。

## だいじなかぞく

――王子ヶ浜小学校一年

わたしは、六人かぞくです。おかあさん、おばあちゃん、おにいちゃん、おねえちゃん、ねこのくろと、わたしです。おかあさんは、やすみのときにいっしょにおかいものにいったり、クッキーをつくってくれたりします。しゅくだいを見てくれることもあります。おかあさんが見てくれると、やりやすいし、うれしいきもちになります。
おばあちゃんは、とってもやさしいです。いっしょにおふろあらいをすることもあります。おばあちゃんは、たわしでこすって、わたしは水をながします。たまに、くろがのぞきにきます。でも水がきらいで、見るだけです。
おばあちゃんがかぜをひいたとき、おかゆをつくってあげました。こころをこめてつくったら、一日でなおりました。おばあちゃんに、
「ありがとう。」
といわれて、うれしかったです。

おにいちゃんと、おねえちゃんはゆうごはんをつくります。たまにしんメニューを出します。このあいだは、しんメニューのもやしまぜごはんが、出ました。おにいちゃんと、おねえちゃんが、シェフみたいに、はっぴょうしました。かぞくみんなでわらいました。
もちろんくろもだいじなかぞくです。わたしは、やっぱりみんなだいすきです。
みんなで、わたしをたいせつにそだててくれているからです。
わたしもこれからかぞくをずっとたいせつにします。

## 命のたん生

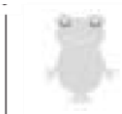
――三輪崎小学校三年

ぼくは、今日の出来事を一生わすれないと思います。
「ピー、ピー、ピー。」
はげしく鳴く声が聞こえてきました。ぼくは、鳥が大好きなので、その声が鳥だとすぐに分かりました。でも、鳥の鳴き声は、いつも優しくておだやかで、聞いていると気持ちのいいものですが、この時の鳴き声は、いつもと様子がちがっていました。
ぼくは、心配になって声のする方に行きました。すると、母鳥が、すの中にすわっておしりを上げて、たまごをうんでいました。うむ時は、
「ピー、ピー、ピー。」
と、はげしく大きな声で鳴いていたので、いたいんだなと思いました。ぼくは、心の中で、「がんばれ、がんばれ。」と、さけびました。すると、たまごはゆっくりと出て、ポトンとすの中に落ち

ました。その後、すぐに母鳥は、たまごをそっとやさしくあたためていました。ぼくは、ほっとして、母鳥に、
「がんばったね。お母さんになったね。」
と小さい声で言いました。
鳥も動物も人間も、みんなこうして大切な命をもらっているのだと思いました。
ぼくも、お母さんが一生けん命にうんでくれました。お母さんに「ありがとう。」を言いたいです。
ぼくは、お母さんからもらった大切な命をこれからも大事にします。

## 元気にしてくれた友だち

神倉小学校三年



わたしは、三年生になってはじめて、本当の親友って思える友だちに出会いました。二年生までよく遊んでいた友だちとちがうクラスになったので、あまり友だちがいませんでした。でも、三年生になってから少し友だちがふえました。なぜ、ふえたかと言うと、一番さいしょに友だちになってくれた女の子が「てん校生」でした。その女の子は、てん校してきたばかりなのに、友だちがたくさんいました。わたしは、見ているうちに、「まけてられない。」と思いました。でも、やっぱりはずかしくて、
「友だちになって下さい。」
なんて言えませんでした。そして、三ヶ月ぐらいたちました。その女の子から、
「じ童館で遊べる。」
と聞いてきました。だから、わたしは、
「いいよ。」
と言いました。そして、学校から帰ったらすぐにじ童館に行きました。そのとき、もう一人の友だちともなかよくなりました。それい来、毎日遊ぶようになり、
「いっしょに遊ぼう。」
って、言えるようになりました。わたしは友だちに自分の気持ちをつたえることができてうれしかったです。なぜ、今まで言いたいことが言えなかったんだろうと思いました。もう、かこのことなんて思い出しません。わたしは、友だちがたくさんいる今が好きだからです。わたしは、本当に親友に会えてよかったです。これからは、もっともっと友だちを大切にして今までどおりなかよくしていきたいし、これからもたくさん友だちを作りたいです。

## わたしの弟

熊野川小学校四年

わたしには、弟が一人います。わたしは、いつも弟にちょっとしたことですぐにおこってしまいます。でも、弟はわたしがおこったときは、こわがっていつもないたり、すねたりするけど、楽しかったことやこわかったことをわたしに教えてくれます。弟は、
「今日、あさひね、みんなといっしょにブロックで遊んだんやで。」
と言ってわたしを楽しませてくれます。わたしは、
「そうなん。何作って遊んだん？」
ときくと、

「家、作った。」
とにこにこしながら返事をしてくれます。
　わたしがないているときは、
「ないてるん？」
ときいてきます。わたしが返事をしなかったら、おもしろいテレビとかを見せてくれます。そうやって一生けん命わたしをわらわそうとしてくれます。そういうとき、弟はわたしのお兄ちゃんみたいに思えます。だからわたしは、友達がこまっているときに、声をかけてあげられるようになりました。友達に楽しかったことやこわかったことやうれしかったことをもっと話せるようになりました。すると、友達がもっとわたしに話しかけてくれるようになりました。
　お兄ちゃんもやさしいし大好きだけど、わたしは弟が大好きです。これからは、ちょっとしたことでおこったりしないようにしたいと思います。

## ごめんね、「イチ」

高田小学校四年

　わたしは、以前友だちに子犬をもらいました。でも、その子犬は生まれてまだちょっとしかたってなかったので本当はまだお母さん犬のそばにいなくてはいけませんでした。でも、わたしが無理を言ってしまい、その子犬をもらってきてしまいました。その時、お母さんが、
「やっぱりまだお母さん犬のそばにおいていたほうがよかったんじゃない。」
と言っていました。わたしは、その犬に「イチ」という名前をつけました。イチはすぐにみんなに好かれてみんな、
「イチ。」
「イチ。」
と言ってイチはみんなといっぱい遊んでいました。
　その日の夜、わたしはイチに牛乳をあげました。本当は犬やネコなどに牛乳をあげてはいけません。でも、わたしはその時そのことを知りませんでした。その夜イチはぐったりしてしまいました。牛乳をあげてはいけないのを家族全員知らなかったのでお母さんは、
「みんなといっぱい遊んだからつかれたんじゃない。」
といいました。わたしは、それになっとくしてしまい、そのままにしてねました。次の日お父さんやお母さんがぐったりしたイチを見て、
「やっぱりお母さん犬のところに返してあげよう。」
といいました。そして、お父さんが友だちの家に返しに行きました。わたしは、とても悲しかったけどイチにはそれがいいのかもと思いました。
　次の朝起きると、お母さんが電話をしていました。
それは友だちとの電話でした。電話を切ると、お母さんが、
「イチがお母さん犬にかみ殺されたって。イチ、二日くらいだけうちで育てたやろ。それでうちのにおいがついてお母さん犬が自分の子だと分からなくてイチはかみ殺されたんだと思うよ。」
と言っていました。わたしは、それを聞いて、
「もらうときにがまんしていたらイチは生きていたのにな。もうちょっとがまんしたらよかった。」
と思いました。その日は学校があったので、わたしはすぐに登校するときの集合場所に行きました。みんなを待っていると一番仲

良しの友だちのあきのちゃんが来ました。あきのちゃんはイチのことが大好きだったのでそのことを話すといっしょに泣いてくれました。わたしは悲しかったけどいっしょに泣いて悲しんでくれてとてもうれしかったです。

わたしは、自分が無理を言ってしまったことを今も思い出すとはんせいします。今、わたしの家にはネコがいます。わたしは、そのネコをイチみたいにならないように食べ物にも気をつけて育てたいです。

## 生きていること

王子ヶ浜小学校四年

ぼくは、自分が今生きていることがきせきだと思いました。なぜなら今でもほかの国で食べ物がなくてうえている人や、戦争でおびえている人などがいるのに、今自分がこんなに平和なかんきょうでくらせるのもこの国で生まれてきたからです。でもぼくは、はじめは少しのけんかなのにすぐに殴り合いになるのも戦争と同じだと思います。戦争もはじめは少しの場所の取り合いなのに、人殺しやなにも関係のない人をばくだんで殺します。ぼくは、戦争をする前にみんなで仲良くくらせばみんな笑顔でいれると思います。

ぼくは、この世界から戦争をなくしてみんなが平和な世界で、みんなが笑顔になって戦争をしようとしている人たちをなくしたいです。そのためにぼくは、世界中に戦争のおそろしさをみんなに知ってほしいと思います。

今まで戦争で亡くなった何億人の人たちは戦争がなければもっと長く生きれたと思います。昔から戦争がなかったら、昔も今もすべてがかわると思います。

ぼくは広島にある原爆資りょうかんへ行き戦争のおそろしさや原爆のこわさが分かりました。そこには銀行の前の階だんにすわっていたときに原爆が落ちてかげだけが残った人や、うでの皮がたれ下がっているジオラマ、原爆が落ちた時間八時十五分に止まった時計などがありました。ぼくは、うでの皮がたれ下がっているジオラマを見て、人間が感じる中で最大のいたみを感じたのではないかと思いました。そのあとほぼ原爆中心地の原爆ドームを見に行きました。見るだけで原爆のこわさが分かりました。らせん階だんの鉄の部分がとけて形が変わったものがありました。中にはがれきが大量に落ちていました。それなのに今日本がこんなに平和なのは、日本が戦争をやめたからだと思いました。世界中が戦争をやめればみんなが日本のように平和なかんきょうでくらせるのではないかと思います。

でも日本がもし戦争をまた始めたら平和という字がなくなって、また日本は昔のように戦争でいろいろな人が亡くなります。そうならないようにするには、日本は、二度と戦争をしないでほしいです。世界中でおこっている戦争はけんかと同じで、どちらも人をきずつけていると思います。なぜ戦争をするのだろうと今でも思います。そう考えると今自分たちが生きていることはきせきだとあらためて思いました。

今でも戦争で苦しんでいる人はこの戦争という争いがなければ苦しまずにすんだり、うえずにすむのになぜ今でも戦争をするのだろうとぼくは、この世界に住んでいていつまでも考えると思います。

## うれしかった

三輪崎小学校五年

ぼくは、後期の委員会活動でボランティア委員になりました。

委員会活動の時、先生に

「老人ホームへ行くで。」

と言われて、紙しばい作りと、歌の練習を始めました。歌は『ふるさと』と『もみじ』です。

委員会活動の時間だけでは準備が間に合わないので、休み時間にも練習や準備をしました。最初の方は、友達と遊びたかったから、「準備したくないな。」と思ったけど、始めて一週間ぐらいたつと、だんだん、紙しばいを作るのが楽しくなってきました。

紙しばいでは、『三びきの子ぶた』をしました。

「このぶた、どんな色がいい。」

とか、

「これどうしたらいい。」

などと話しながら作っていきました。

そして、本番の日、老人ホームへ行くと、すごくきん張してきました。心臓のバクバクが止まりませんでした。

三びきの子ぶた、もみじ、ふるさとの順番でしました。

ぼくは、紙しばいを読むのが一番だったので、とても、とてもきん張しました。紙しばいの間、おばあちゃん達は、真剣に聞いてくれていました。がんばって作って良かったな、と思いました。

次に歌を歌いました。おばあちゃん達は、もみじも、ふるさとも知っていたので、楽しそうに一緒に歌ってくれていました。

そして、風船バレーをしました。おばあちゃん達は、楽しみながら、うれしそうに、

「これ、おもしろいわ。」

「わはははは。」

「楽しいわ。」

「あ、そっちいったで。」

などと、楽しそうに遊んでいました。ぼくも、すごく楽しかったです。

それから、一緒に遊んだおばあちゃん達、一人一人と、

「ありがとうございました。」

と、あく手をしました。

最後に、部長の秋間こうすけ君が、

「ありがとうございました。」

と言いました。

すると、座っていたおばあちゃんが、感動して泣いていました。

ボランティア委員で、本当に良かったな、と思いました。理由は、人を喜ばせることができたからです。これからも、このような機会があったら、人を楽しい気持ちでいっぱいにさせたいからです。

六年生になると、一年生のお世話をしないといけないので、来年はそれもがんばりたいと思います。

## 言葉の大切さ

熊野川小学校六年

私は、最近になって「言葉」がすごく大事だなあと思うようになってきました。自分では冗談で、

「ばかやなあ。」
「あほやなあ。」
という言葉を相手に使ってきました。自分では、何でもないことと思っていても、それを聞いた友達はすごく傷つくことに気がつきました。だから、自分が言われていやな言葉は、相手に言わない方がいいと思います。
　他にも、人の体を見ていやなことを言ったりする人もいます。そういうことを言われた人の心には、ずっと心の傷として残ると思います。
　それに、うそをつくことも、人をだましてそのまま思い込ませてしまう悪いことです。
　また、ないしょ話も、人に悪い気持ちを与えてしまいます。みんなで遊んでいるとき、ないしょ話をしていると、自分のことを言われているようで、いい気持ちがしません。こういうことも、友達を傷つけることになるので、やめた方がいいと思います。
　人前で言葉を使うときは、
「ばかやね。」
など、簡単に言わず、言葉を選んで使いたいと思います。自分が言われていやかどうかを考えてから、言葉を大切に使う方がいいと思います。自分では、何とも思わなくても、心あたたかくない言葉で、相手の人はすごく悲しい気持ちになります。それに、その人は、がまんしながら毎日を送っていると思います。
　言葉の暴力は、一生その人の心に残ります。これからは、一つひとつ言葉を選んで使っていこうと思います。

## 「自然」と生きる

――高田小学校六年

　この世界にはたくさんの自然があります。しかし、今も、今までも人の欲のためにたくさんの自然が破壊されてきました。
　破壊された自然を取り戻すにはどうしたらいいのでしょう。そこであることを思いつきました。
　人々に自然を残そう、自然を取り戻そうと呼びかけ続けたらいいのではないかと。
　私がテレビをつけると、金の採掘をしている人たちの被害を受けている村を取材する番組をしていました。
　金を採掘する人たちのせいで山や川、動物、村人たちが大きな被害を受けていました。
　山は削られ、動物たちはすむところをなくしてしまいました。
　また、金を採掘する人たちは、ある事件をおこしました。
　金を純金にするのに使う水銀を山の近くに運ぶとちゅうトラックから水銀を落としたのです。そのせいでにんしんしていた人は流産し、たくさんの人が苦しみました。それに作物や草木もかれていったのです。
　さらに金を採掘する人たちは使用した水銀を処理せずにそのまま川に流していました。それが原因で川は死の川となり、魚や動物たちがたくさん死んでいきました。
　人は失ってはじめて、そのものの大切さを知ります。しかし、すばらしい自然を失ってからではもう遅いのです。そのことを胸にきざみこみ、同じ過ちをくりかえしてはいけません。
　一度破壊された自然を元に戻すのには百年近くかかるといいま

す。ならば、どうしたら良いのでしょう。
私は、みんなが自然のすばらしさを知ることだと思います。
私が住んでいる高田には美しい自然がたくさんあります。その自然を保つためには私たちが守っていかなければいけないのです。
美しい自然を守っていくにはまず小さなことから始めていけば良いと私は思います。
道ばたの草を抜くだけでも自然は保たれます。なぜ、草を抜くだけで、と不思議に思う人がほとんどだと思います。しかし、考えてみてください。ゴミを道ばたに捨てて行く人はだいたい、草などがしげっていて、ゴミを捨ててもわからないところにすてませんか。だから草を刈って、見栄えをよくしておくといいのではないでしょうか。
それでも、ゴミを捨てられていたら、そのゴミをひろっていけばいいと思います。このようにすれば道ばたの小さな自然が保たれます。
私は自然が大好きです。だから、すばらしい自然を私たち人間の手によって破壊するのはいやなのです。
私は特に高田の川が好きです。なぜかというと、水が透きとおってすごくきれいですし、たくさんの生き物がいて、夏になったらいっしょに泳げるからです。
私はそんな高田川をきれいなままで残したいです。そのためにみんなも高田川に来て遊んでほしいです。それでたくさんの人が高田川の良さを知ったら川を汚したり、川の中の生き物に有害なものを流したりはしなくなると思います。
それは、高田川だけに限りません。たくさんの人がたくさんの自然とふれあっていけばいいと私は思います。
私たちの生活に必要不可欠な水。
今は蛇口をひねると安全な水が出てきます。それは日本にきれいな川や湖があるからです。しかし、その川や湖に水銀などの有害物質が入ったら、蛇口をひねっても安全な水は出てこなくなります。そうならないようにするためにも、人と自然がいっしょに生きていかなければいけないのです。
経験の浅い私には何が完璧な自然なのかは分かりません。しかし、すばらしい自然は数えきれないほどあります。私はこれから『すばらしい自然』について考えを深め、たくさんの『すばらしい自然』に出会っていきたいです。

## 命を大切に

神倉小学校六年

みなさんは、命について考えたことはありますか。命とは、とても大切なものです。たった一つの命がなくなれば、多くの人が悲しみます。その理由は、たった一つの命でも大切にされてきたからです。
命は全て、みなさんのお母さんのお腹から生まれてくるものです。そしてその命は、みんなに愛され、大切にされて成長します。やがて大きくなり、環境も変わって学校や社会に進んでいきます。小学校や中学校、人によっては大学に通うようになります。その中で多くの人と出会い、友だちになっていきます。
しかし、その中で「いじめ」というものが発生することがあります。
いじめによっては、自分の大切な命を自分で捨てる「自殺」という行為を取ってしまう場合もあります。自殺をすると多くの人が悲しみます。だから、自殺は絶対にいけないことだと思います。

そのためには、いじめを絶対に許さず、なくしていく必要があると思います。

人によっては、生きたくても生きられない人も、この世にはたくさんいます。命のありがたさを深く感じている人々もいます。

インターネットで調べてみると、日本は自殺をする人が多いというランキングで十八位だそうです。世界の国一九六カ国もあるのに、十八位だなんてすごく高いなあ、と感じてびっくりしました。そして日本では、一年間に約三万人もの人が自殺をしているそうです。三万人というと神倉小学校の人数の約六十倍、新宮市の人口と同じくらいの人が亡くなっていることになります。それほど多くの人が自ら命を絶っているのです。

二〇一一年三月十一日、東北地方を襲った東日本大震災は、震度七でした。その地震により、多くの人々がなくなりました。その中には小さい子どももたくさんいました。

このように、生きたくても生きられない人々もいます。

私たちは家に帰った時、

「おかえり。」

朝学校に行くときには、

「いってらっしゃい。」

と言い合える家族がいます。喜びや悲しみを分かち合える仲間がいます。健康な体があります。そして、大事なたった一つの命があります。このことを当たり前と思わず、しっかりと考えたいと思います。

私たちは幸せです。その当たり前の環境に流されず、自分の命を大切にしていかないといけない、と思います。みんなが自分の命を大切にできる世の中になってほしいと思います。

## 誰もが一生懸命

――王子ヶ浜小学校六年

あなたは、障がいのある方がどんな生活をしているのか知っていますか。障がいのある方というのは、例えば、耳が聞こえない人や目が見えない人、他にも足や手が不自由な人たちのことなどを言います。

耳が聞こえない人は、手話をします。目が見えない人は、点字を打ちます。けれど、手話や点字は、わたしたちには伝わりません。なので、通訳をしてくれる人が必要になります。

障がいのある方は、わたしたちとちがって、大変です。目が見えない人のことを考えてみましょう。いつでも好きな所に安全に安心して行けることは、誰もが日頃、当たり前のようにしていることですよね。わたしたちにとっては、好きなときに好きな買い物をする。本を読む。旅行をする。など、どれをとっても、ごく当たり前のことですが、目の不自由な人がそれを一人でするのは、とても難しいことです。

これを解決するために、白杖や盲導犬による歩行訓練、誘導ブロック、ガイドヘルパー制度などがあります。

また、わたしたち人間の知識は、八十パーセント以上が、目から得られると言われています。周囲の風景や動きなどの状況を見ることにより、瞬時に判断し、自分の位置を知り、安全や安心、自信、安らぎを手にいれることができます。しかし、目が見えないとそれがたやすくできなくなります。

例えば、相手の顔色がわからないため、知らず知らずのうちに周囲の人を傷つけてしまったり、人が近くにいることがわからな

くて、声をかけられなかったり、大声で呼んでしまったりということがあります。

だから、障がいのある方は、わたしたちの人一倍がんばっているのです。そして、一生懸命生きているのです。

そういう障がいのある方に、わたしたちはどうするといいのでしょう。耳が聞こえない人は、車がきた音が分からないので、教えてあげる。目が見えない人には、信号が変わったことを教えてあげる。手が不自由な人には、何かを持ってあげる。足が不自由な人には、こけないように支えてあげる。など、わたしたちにしてあげられることは、たくさんあります。

そして、もし自分の体のどこかに、障がいがあるとするならば、一体、何を思うでしょうか。きっと、耳で音を聞きたいと思うだろうし、目でいろんなものを見たいと思うでしょう。そんな気持ちで心がいっぱいになってしまうと思います。心が痛くなります。それを考えると、障がいのある方は本当に一日一日が大変なのではないでしょうか。

みなさん、もっともっと知ってください。障がいのある方の生活の大変さを。そして、もってください。障がいのある方へのあたたかい心を。

最後に、今年のリオパラリンピックで、金メダルをとった人が何人もいます。障がいのある方でも、やりたいと思う気持ちがあれば、目が見えなくても泳ぐことはできるし、足が不自由でも、義足をはけば走ることだってできるのです。強い気持ちをもてば、国をせおって、パラリンピックという大舞台に出ることも可能なのです。

「誰もが一生懸命生きている」ということを忘れないでください。

## 中学生の部

### 言葉

緑丘中学校一年

私は、自分の意見を相手にきちんと伝えることはとても大切なことだと思う。自分の意見をしっかり伝えることで、いろいろな見方をすることができたり、悪口などを言っている人たちにきちんと注意したりすることで、心が傷つくのを防ぐことも可能だと思うからだ。

私が友達と話をしている時のことだ。友達が悪口を言い始めた。私は、悪口は言ってはいけないと分かっているのに、注意をすると、私も悪口を言われたりするのではないかと思い、その子に合わせて悪口を言ってしまった。その悪口を、悪口を言われていた子が聞いてしまっていた。その子は、つらそうな顔をしていた。私は、その子の気持ちがすごく分かる。私も悪口を言われていたときがあったからだ。悪口を言われたとき、私はとてもつらかった。だから、その子の表情を見て、とても悪いことをしてしまったと後悔した。「なんで注意しなかったんだろう。」と思った。悪口を言われたときのつらさや悲しさを知っているのに、悪口を言っている子に、ちゃんと、「悪口は言ってはいけない。」と、自分の思っていることを言えなかったのがとても悔しくなった。別の日にも、また友達は悪口を言い始めた。私は、勇気を出して、その子に、

「悪口を言われた子は傷つくからやめよう。」

と言ってみた。すると、一緒に悪口を言っていた子たちは、

「そうだね。」

と、分かってくれた。私は、うれしかったのと同時に安心した。そして、その日から、あまり、悪口を聞くことはなくなった。

私は、一番人を傷つけるのは言葉だと思う。切り傷やすり傷などのけがは、バンソウコウを貼ると治るけれど、心の傷は、どれだけ時間が経っても治ることのない深い傷になると思うからだ。言葉で傷ついた心は、言葉で治すしかないと思う。だから、私は、悪口を言ってしまった子にあやまった。すると、その子は許してくれた。

その日から、私は、その子と毎日のように一緒に遊んだ。一緒に遊ぶと、時間があっという間に過ぎていく。その子は悪口を言われるような子ではなかった。何も知らないのに悪口を言ってしまったこと、傷つけてしまったこと、悪口を言われているのを聞いて、傷ついていた時の表情が今でも忘れられず、心にずっと残っている。

この経験から、言葉の使い方、自分の意見の伝え方をよく考えて話すことが大切であることが分かった。これからも友達を大切にしていきたい。

### いじめ

城南中学校一年

いじめとは、人の希望や自信、そして、いじめがどんどんエスカレートしていくと、命をうばってしまうこともあります。

いじめは、自分が、遊びで暴言をはいたり、ちょっとした、いたずらで相手を傷つけたりしてしまってもいじめにはいってしま

います。まだ、かるく、「死ね」とか「消えろ」などの言葉を使っている人がいます。言葉は、目に見えませんが、心には残ります。だから言われた方には、「死ね」などの言葉が、心にささり、ずっと残ります。ちょっとした暴言も、相手にしては、立派ないじめです。そして、「死ね」や「消えろ」などの言葉は、かるく使っては、いけません。この言葉は、すごく重みのある言葉です。そして、これらの言葉は、全く、使う必要がない言葉です。相手が誰だとしても、絶対に使ってはいけません。相手の心を傷つける言葉は、絶対にいけません。

日本でも、いじめは、まだあり、なくなってはいません。

今は、たくさんの人が、生きたくても生きられず、病気などに、苦しんでいる、世界中の人々がいます。それなのに、人を傷つけ、その人の命をうばってしまう事が出来てしまうのだろうと私は、思います。いじめても、何も良いことがなく、いじめている側がただ楽しくて、やっているのかもしれません。けど、いずれは、罪悪感が残るだけだと思います。そして、いじめられている側は、毎日が嫌で嫌でしょうがなくて、死んだ方がましだと自殺をしていってしまったり、登校きょひなどに、なってしまうのだと私は、思いました。だけど、死んでしまっても、誰も喜んだりはしません。

私が、この世で、一番大切な物は、「命」だと思っています。なぜなら、命がなければ仕事も出来ず、遊んだり、学校に行ったり出来ないし、うれしいとか、悲しいとか、感情を感じることだって出来ないからです。

私が、いじめをなくす事に、必要だと思うことは、「勇気」だと私は、思います。なぜなら、クラスの中に、いじめられていた人がいたとしても、いじめている側の子に、きらわれたくないと思い、注意は、出来ず、そのままになってしまっている事が多いと思います。そして、自分が注意すると、「次、いじめられるかも」と思って、注意しないということも多いでしょう。だけど、友達だったら、間違いを教えてあげることが、とても大切なことだと思います。

そして、もし、今、いじめられている人はほんの少しの勇気を出し、だれかに相談したら、きっと、気持ちは、楽になります。また、これからの、人生を、変えることになるかもしれません。一度きりの人生は、楽しんだ方が絶対にいいと思います。だから、絶対に、今、いじめにあっているとしても、勇気を出して、誰かに、相談してみてください。あなたの人生を変える第一歩になると思います。

いじめとは、人を傷つけるだけで、いじめる側もいじめられる側も、誰も得はしません。ただ、いじめている側は、おもしろいとか、楽しいとか思っているかもしれません。だけど、いじめられている側や、見ている人の事を考えると、悲しい気持ちでいっぱいだと思います。今、もし、相手を傷つけてしまっているなと思っている人がいるのなら、まず、相手の気持ちを考えてください。きっと相手は、いやだなという思いでいっぱいだと思います。そして、絶対に、「死ね」などの相手の心が傷つく言葉は、使わないでください。

これからは、相手の気持ちを考え行動し、絶対に、いじめはしないでください。相手の心や命を尊重し、友達を大切にしてください。

# 周りの人を大切に

熊野川中学校一年

岐阜にいる私の祖父は、今から六年前に倒れ、今施設にいます。

祖父は六年前まで、車を直す仕事をしていました。夏休みなど、岐阜に行ったときは、いつも祖父の仕事場へ行っていました。祖父はパチンコが好きで、いつも商品を持って帰って来ていました。喫茶店も好きで、毎朝連れてってくれました。

ある日突然、母が泣いて部屋に来ました。私は、母が泣いているところを初めて見て、びっくりしました。母が言いました。「おじいちゃんが、倒れたんだって。」その言葉を聞いて、「うそだ。」と思いました。前は、小さい頃だったので、祖父がどうして倒れたか、分からなかったけれど、今ならどうして倒れたか分かります。

祖父は、脳梗塞でした。

祖父は何日か入院した後、家に帰って来て過ごすようになりました。車いすに座ってテレビを見たり、自分で飲んだり、食べたりしていました。トイレのときは、自分から祖母に言って、トイレへ連れてってもらっていました。

祖父は、自分でお風呂に入れないから、ヘルパーさんが家に来て、お風呂に入らせてもらっていました。そのとき私は、「家のお風呂場で入るのかな。」と母に聞くと、「どうやろうね。見といたら。」と言われたので、見ていると、家の中に何かが組み立てられ、お風呂が出来ました。「お風呂場じゃなくて、お風呂を組み立てて、入るんだね。」と言うと、「そうなんやね。」と母が答えてくれました。私は、そういうのを見れて、すごく勉強になりました。

祖母は、毎日祖父を見ることは出来ないから、一週間に二、三回ヘルパーさんが来て、車に乗せて行きました。「どこへ行ったの。」と私は祖母に聞くと、「一週間に二、三回見てもらうの。おばあちゃんも大変やからね。」と言っていました。

祖父は、私がそばにいると、楽しそうに話しかけてきます。でも、私には何言っているか分かりません。すると母が、「うんうんって言ってあげたらいいよ。」と言いました。それでも、祖父が私に一生懸命話してくれているのに、そんなこと出来ないと思いました。でも私は、無視するよりは、ましかなと思いそうするしかありませんでした。

祖父は、私の名前を覚えていないけれど、母が、「愛里やで。」と言ってくれます。母が、私の写真を祖父に見せて、「これ、誰やと思う。」と聞いて、私の方に指をさし、「これ、愛里やで。」と言ってくれます。祖父は、私の名前を言うと、少し悩んでから、思い出したような顔をして、手を出し握手をしてくれます。そのときが、私の嬉しいときです。

私が、五、六年生まで、祖父は家にいましたが、その後施設へ入っていました。祖父に会いに行ったとき、祖父と仲良く話をしてくれる人達がいて、嬉しかったです。祖父の施設の部屋は、窓から道路が見えます。その道路に車が通るといつも、車を見ているそうです。私は、やっぱり祖父は車が好きなんだなと思いました。

私は、祖父みたいに倒れ、施設へ入れられている人、目が見えない人、そういう人を見ると時々、かわいそうに思います。私は、その人達を見つけて助けたいけど、はずかしくて、なかなか声をかけて助けられません。祖父が、笑顔で話をしてくれているのに、私は笑顔すら作れません。そんな自分が、なさけないと思います。

どうしたら、笑顔で話したり、声をかけて助けたり出来るのかを考えてみようと思いました。
私は一つあることを、思いうかびました。祖父が生きているうちに、はずかしがらずに、ちゃんと恩返しをしようと思います。祖父との思い出をこれからもたくさん作っていこうと、思います。
私は、祖父が倒れたことで、こんなに悲しくなるんだと気づきました。そして、私の周りにいる地域の人、友達、家族を大切にしようと、私はそう思いました。

## 子どもの人権

光洋中学校一年

私は、最近、ドラマで「はじめまして、愛しています。」というドラマを見ています。そのドラマは、実の親に捨てられた男の子と本当の家族になろうと、特別養子縁組を申請する、夫婦と男の子の物語です。
ニュースで、虐待を受けた子ども達を見ることはあるけれど、私はドラマを見るまで、児童養護施設や特別養子縁組があるのを知りませんでした。
児童養護施設とは、親からの虐待や育児放棄など、色々な家庭事情がある子たちが行くところです。私はそれを知って、子どもにも人権があるのに、虐待したりするのはあまりにもかわいそうだと思いました。親がそんなことをしなければ、子どもは児童養護施設に入らなくてすむからです。
そんな子どもたちが幸せになるために、児童養護施設で働く人たちは、お父さんやお母さん代わりになったりします。その子たちの人権を守るために、養子縁組や特別養子縁組があります。ただし、里親になるのは誰でもいいわけではなく、いろいろな審査を受けて何ヶ月もかかる。親になりたい人もその子の幸せを考え、いろんな場面にぶちあたります。
虐待された子どもたちは、実の親のように暴力をふるわないかなどを試します。例えば、床にジュースをわざとぶちまけたり、赤ちゃんのころに戻ったようになってしまったりします。床にジュースをぶちまけられたら床が臭くなるし、赤ちゃんに戻ったようになったら、ずっと近くにいないと泣いてしまったりして大変です。里親になりたい人も、本当にその子のことを愛していないと、こういう事にはたえられないと思うので、すごいと思いました。
そして、子どもはそんな事をしながら、里親になる人が本当に自分を愛してくれるのか？信頼できるのかを子ども自身が感じていくのだそうです。普通に生活していれば、愛情を受け、幸せに過ごしていけるはずなのに、いろんな事をして試さなければ大人を信じることができないなんて、かわいそうだなと思いました。
私は、お母さんとケンカもしますが、虐待なんて絶対にしません。いっぱい遊んでくれるし、私たちの事を一番に考えてくれて、愛情を感じます。でも、そうじゃない子たちもいて、その子たちは、どうやって生活していくのかというのが、ドラマや、お母さんの話を聞いて、少しですが分かりました。まだまだ自分では理解できない位、難しい問題なんだなと思いますが、どんな事情があっても、子どもが幸せに暮らしていける社会をつくっていってほしいと思います。そのためにはどうしていったらいいのか私には想像もつきませんが、自分がもし子どもを産んだら、虐待をせずに幸せな子どもにしていきたいです。皆がそうすれば、子ども一人一人の人権を守れ、大人も子どもも幸せになれると思います。

## ８月６日

緑丘中学校二年

１９４５年８月６日、午前８時１５分、アメリカ軍によって広島に原子爆弾が投下された。この日を境に、日本は唯一の被爆国となった。私は、その後、広島にどのような影響があり、どのようにして、今に至るのかが気になった。

そもそもなぜ、広島に原子爆弾が投下されたのだろうか。アメリカ政府は、日本本土での直接戦を避け、早期に決着させるためだと説明している。一方で、放射線障害の人体実験を行うためだったのではないか、という説もある。もしそれが本当のことなら、私はそう考えた人たちを許せない。アメリカの勝手な実験に、数えきれないくらいたくさんの人たちが、被害をうけた。その過去は決して、消えない。そして、今もなお、たくさんの被爆者の人達が苦しんでいる。

毎年８月６日には、広島の原爆のことについて、テレビで報道されている。今年、私は被爆者の人たちが「原爆は絶対にダメ。」というような内容の歌をうたっているのを、番組でみた。その曲の歌詞には、被爆者の人たちの切実な想いが込められていた。あるフレーズで、

「もう２度と作らないで、私たちヒバクシャを。」

というところがある。私はそれを聴いて、体験したことのない出来事が、なぜかリアルに感じた。きっとその曲には、原爆で亡くなった人、その人を必要としていた人、その人の大切にしていた人、いろんな人たちの想いやこれからの未来への希望などが入りまざっている。私たちが広島の原爆を後世に伝える方法の中で、「歌って伝える。」というのは、とても良いと思う。被爆者の人たち自らが、自分たちの声で、表現しながら伝えていく。それを、私たちの年代が伝えていく。そうやって、時が過ぎても、昔あったことは忘れないようにしていけたらいいと思う。次の世代に教えていけたらいいと思う。そうすることによって、原爆によって亡くなってしまった人の「死」も、意味のあるものにできるのではないかと、私は改めて強く思った。

私たちは、１９４５年の８月６日を体験したことがない。そして、これから体験することもないだろう。それは、私たちにとって最高の幸せであり、また、原爆で被害をうけた被爆者の人たちの永遠の願い、希望でもあると思う。私は、その事についてもっとたくさんの人たちが、別の国の人たちが、知ることで、世界中の人が、幸せになれると思う。そして、世界中に、大きな青い空が広がってほしいと強く願っている。

## 奇跡

城南中学校二年

私は今、友達と勉強したり、クラブをしたり遊んだり、爆笑したり、時には悩んだりしながら毎日を過ごしています。何気ない毎日だけど私はこの十三年間でとても大切なものを得ることができました。それはいつも私の側にいてくれる友達です。友達がいるから辛い事があっても乗りこえられるし、自然と笑顔になれる自分がいます。私の思い出には、いつも友達がいます。幼稚園の時、引っこしてきて不安だった私に

「あかりちゃん。今日からよろしくね。」

と優しく話しかけてくれたのが友達でした。それがあったからすぐに新しい友達とも仲よくなれました。学校行事のキャンプや修学旅行はいつも笑わせてくれるムードメーカーの友達のおかげで最高の一日になりました。今年の体育祭ではたくさんぶつかり合いながらもとても素敵な体育祭にする事ができました。

私達人間には色々な「個性」があります。人それぞれ個性が違うのでぶつかる事も多いはずです。だから今この人は何を考えているのか、どう思っているのかをきちんと分かって話をする必要があってそれをできるのが友達だと思います。でもそれは表情や行動だけでは分かりづらいです。だから自分の口できちんと思いを伝える事が大切だと思います。どんなに仲が良くてもやっぱり言葉は大切です。最近ではツイッターやラインなど顔をあわさなくても友達と連絡を取りあえる方法が増えてきました。だから大切な事とか素直な気持ちを直接口で伝える機会が少なくなってきている気がします。友達はけいたいの中だけの関係じゃなくて口で本音を言い合える、恥ずかしがらずにお互いの良い所をほめ合えるような存在の事をいうんじゃないでしょうか。

私達には、「過去」があり、「明日」があります。でも過去はどれだけ戻りたくてももう二度と戻る事はできません。明日の事も未来の事なんて想像できません。私達ができる事は今を楽しんで精一杯生きる事です。今自分が一番できる事をする事です。私はそれがどんなに小さな事でもいいと思います。例えば「友達と遊ぶ時間を精一杯楽しむ」とか「大切な人といる時間を大事にする」とかそんな事で

「今日も幸せだった。」

と胸をはって言えると思います。友達とケンカして明日謝ろうとか伝えたい事があるけど今度にしようという気持ちは誰もが

「必ず明日がくる。」

と心のどこかで感じているからです。でも明日が必ずくるとは限りません。なぜなら私達は未来を知る事はできないからです。今、友達と勉強したり、クラブをしたり遊んだり、爆笑したり悩んだりできる事は当たり前に思えるけど奇跡です。明日がくる事もあさってがくる事も奇跡なんです。だからその私達の周りにあふれている奇跡に感謝して、「今」という幸せで大切な時間を精一杯生きて楽しんでいきたいです。今起きている全ての事に意味があります。勉強は「夢」に一歩近づくため、クラブは仕事での「上下関係」や体力をつけるため、遊びはたくさんの「思い出」をつくるため。人生にむだな事なんて一つもありません。だから一分一秒を大切に、大切な人と暮ごせる事は奇跡なんだと感じながらたくさんの幸せに出会っていきたいです。そして世界にいる全ての人に幸せがおとずれますように。

## アンプティサッカー

――近畿大学附属新宮中学校二年

僕がアンプティサッカーについて書こうと思った理由は、地域のクラブチームでアンプティサッカーの選手と試合をするという機会があり、僕は参加できませんでしたが、同じサッカープレーヤーとして気になったからです。アンプティサッカーとは、主に上肢、下肢に障がいを持った人がプレーするサッカーのことです。

サッカーをするのはとても楽しく、おもしろいのですが、やはりしんどい時もあります。苦手なプレーもたくさんあります。それを克服するには大変な時間や気力が必要です。その時のアンプティサッカーの選手は、体にハンディキャップを持ちながらも必

死に練習していたそうです。今の僕よりも経験が多く、プレーの技術や精神的な強さも僕よりも断然すばらしいと思いました。アンプティサッカーのプロになるには、それは僕には考えられないほどの努力をしてきたと思います。僕たちがサッカーするにも努力は必要ですが、それに加えて体にハンディキャップがある分、その二倍、三倍の努力が必要なのだと思います。

アンプティサッカー日本代表のゴールキーパー、長野哲也選手は仕事中に機械に腕を巻き込まれ、今までしていたサッカーができなくなってしまいましたが、リハビリやトレーニングを続ける中で、退院後義手を買いに行った店でアンプティサッカーの記事を見つけ、アンプティサッカーの日本代表を目指したそうです。僕には想像することしかできませんが、それは相当な努力が必要だったと思います。

そして僕が驚いたのは、アンプティサッカーの選手は自分のハンディキャップを気にするよりも、ただ大好きなサッカーができることに感謝してプレーしているのだということです。

アンプティサッカーについて知ったことは、自分の練習中の態度や試合でのプレーを振り返る機会にもなりました。これから先、練習を続けていれば、しんどいこともうまくいかないこともたくさんあると思います。それでも自分に限界をつくらず、昨日より今日と、日々レベルアップして技術面でも精神面でも強くなりたいと、より一層思うようになりました。

## いじめで亡くなる人を救いたい

熊野川中学校二年

今、私達が生きている中で、毎年たくさんの若者の命が亡くなっています。原因はいじめです。「いじめ」というものはとても恐ろしいものです。私は、今までいじめにあったことがありませんが、都会の学校などではよくあることのようです。「いじめなんてうちの学校には絶対ない。」と言い張っている人もいますが、その人が気づいていないだけで、実際にはあるかもしれません。ニュースを見ていると、いじめに遭い、自殺してしまった子の学校の人は「そんな様子はなかった。」とよく言っています。自殺してからは気付いても全く意味がありません。だから、いじめに遭っている人は、なかなか言えないだろうけど、頑張って家族や先生など安心できる人に相談してほしいです。また、私はもう一つ、いじめは恐ろしいなと思うことがあります。それはいじめが起きるまでの速さです。いじめは本当にちょっとしたささいなことが原因で始まります。相手が自分に対してちょっと気にくわなかっただけでいじめが始まります。いじめはどんどんエスカレートします。最初はグループからのけ者にしたり、陰口を言ったりすることなどが起こります。それでも十分つらいことだけど、更につらいこともあります。友達から万引きをさせられる、自分の物を壊される、本当に最悪です。している人達は楽しいのでしょうか。人が苦しんでいるのを見て、一体どこが面白いのでしょうか。私はよくわかりません。その子はどれだけつらい思いをしているか分からないのでしょうか。そして、だんだん堪えられなくなって、信頼できる人もおらず、とうとう自殺に走ってしまいま

す。

いつ私の周りでいじめが起きるか分かりません。私の友達や自分自身に起こる時は、ないとは言えません。もし友達がいじめられていたら、救いたいです。ニュースを見ていて、知らない人が自殺したと聞いただけでも悲しい気持ちになります。自分が知っている人や大切な人が自殺なんてしたらもっと悲しい気持ちになります。亡くなってしまえば楽になる、なんて考えはやめてほしいです。確かに自殺してしまえばいじめはそこで終わるかもしれません。けれど周りの人の悲しみは消えません。自分の事を大切に思ってくれている人は必ずいます。その人もきっと悲しみます。だから自殺するということは自分一人の問題じゃないことを分かってほしいです。一人でも助かってほしいです。それが私の願いです。

## プライバシーと人権

高田中学校二年

私は、プライバシーと人権の関係を考えました。最初に考えたのは、プライバシーはなにかということです。私の考えは、プライバシーは人権と深く関わっているもので、個人情報などの重要なものだと考えました。プライバシーとは、私生活上の事柄をみだりに公開されない法的な保障と権利のことで、始まったのは１８９０年でルイス・ブランダインという人が主張しました。プライバシーを保障している法律は、個人情報保護法という法律で、個人情報の有用性に配慮しつつ、個人の権利利益を保護することを目的とする。これを見て思ったのは、プライバシーの考えが出てきたのは最近のことなんだなと思いました。それに相手のプライバシーを侵害しないようにするのは、相手の人権を守る上でとても大切なことだと思いました。しかし、一部の人たちは、この法律の無理解によって過剰に反応するので、その場合はしっかり説明したほうがいいと思います。

次に、日常での人権とプライバシーについて考えました。最初に考えたのはインターネットのことです。インターネットではウイルスなどで個人情報が取られてしまうこともあるし、ツイッターやフェイスブックなどのアプリケーションで個人情報を知らないうちに他人に使われたりすることがあるので、注意しなければいけないと考えました。インターネットでむやみに、写真や個人情報を載せるのは危険だと思いました。

いじめのことについても考えてみました。いじめは学校に限らず社会人にもあることです。いじめは相手の人権、プライバシーを侵害し、最悪の場合自殺させてしまうこともあります。いじめが起きないようにするのは大変だけど、おきたらすぐに対処しなければいけないと思いました。個人情報からいじめに発展してしまうこともあるので気をつけなければいけないと考えました。

人権は守るべきものですが、それを守らない人もいます。自分もそういうことがないようにしなければいけないと思います。人権を守るためには人々の意識が大切だと考えました。人によっては一部の人に人権がないと言う人もいます。例としては、白人による黒人の差別やナチスによるユダヤ民族の迫害があります。なので、私は個人の意識が人権を守る上で一番大切なことだと考えました。人権に対して思ったことは、人権に対する考え方は人それぞれ違うので、相手の考え方を聞いて違いを見つけることが大切だと思いました。そして人権を守るためにも相手のことを考えた発言、行動をするべきだと思いました。

プライバシーと人権について考えてみて、接点が多く、どちらもしっかりと守らなければというところが共通しているなと思いました。

## 祖父の初盆で考えたこと

――光洋中学校二年

僕の祖父は昨年十一月、肺炎で亡くなった。僕はその日の午前中、ヤタガラスでサッカーの試合をしていた。昼過ぎに家に帰り、急いでシャワーをした後、父や弟達と一緒に病院に向かった。六階まで急いで上がり、病室のドアを開けると、祖母、伯母、母、そして看護師さんがいた。涙をためた母が僕達を見て静かに首を横にふった。一瞬何が起きたのかのみこめなかった。が、たった今、息を引き取ったところだったようだ。僕は中に入り、じいちゃんのベッドのそばに行った。ベッドの上のじいちゃんは、ただ眠っているようだった。「ん？」と僕達に気付いて目を開けてきそうだった。いつもと同じ、優しい寝顔に見えた。じいちゃんの肌にふれると、まだ温かかった。

僕は泣いた。声をあげずに泣いた。

僕のじいちゃんは、遊びに連れていってくれるわけでもないし、小遣いをどっさりくれるわけでもない。でもいつも僕達のする事を応援してくれていたし、帰る時にはいつも縁側に立ち、「気ぃ付けよよ、又明日」と言って見送ってくれた。真面目で優しかったじいちゃんが、僕は大好きだった。

そしてこの夏、そのじいちゃんの初盆を迎えた。初盆とは、「人の死後、四十九日の忌明けを過ぎてから、初めて迎えるお盆のこと」だそうだ。この初盆に、大阪にいる伯母の家族も帰省した。ただ遊びに帰ってくるいつもの夏とは少し違った。

八月六日、田辺の海蔵寺というお寺の和尚さんが佐野の祖父の家まで初盆の法要に来てくれた。そこで、こんな話をしてくれた。「今、世の中は大変便利な時代になりました。スマートフォンでいつでもどこでも何でも情報を得ることができます。もしかすると、近い将来、こんな法要も、わざわざ寺からそれぞれのお宅に伺ってお経をあげなくても、スマートフォン越しにパパッと済ませられる時代が来るかもしれません。食べ物は変わり、着る物も変わり、私達をとりまく環境はどんどん新しく便利に変わっていきます。でも人を想う心というものは、いつの時代も変わりません。スマートフォン越しに法要するなんてことは私達はしません。なぜなら、人間の本質というものは、いつになっても変わらないからなんです。」

この話を聴いた僕は、いくら自分達の生活が便利で楽になっても、いくら自分たちの衣食住が変わっても、相手に対する想いさえあれば、とるべき行動は、昔も今も、そしてこれからも変わらないものなんだなと感じた。じいちゃんもきっと今、喜んでくれているだろうなと、その時思った。

そして和尚さんは「十二日に迎え火、十五日に送り火もしてあげてください。」と言った。迎え火とは、「先祖の霊が帰ってくる時、自分の家の目印となるもの」で、送り火は、「私達がしっかり見送っているという証」だそうだ。

でも僕は、迎えるとか送るとか、火を焚きながらも、ピンとこなかったし、送る時は、さびしくも悲しくもなかった。なぜなら、じいちゃんは、いつも僕達のそばにいてくれているような気がしているからだ。

僕は「死」というものを初めて身近に感じた。ショックも大き

かった。でも今はもう僕は泣いていない。家族や友達がいるからだ。

これからもいつもじいちゃんが見守ってくれていると思うから、僕は毎日、遊びに勉強そして大好きなサッカーも、元気に頑張っていこうと思う。

## いじめの解決策

近畿大学附属新宮中学校二年

「いじめ」と聞いて人はどう思うでしょうか。いじめを受けた人、受けている人にしかわからないことが多くあると思いますが、今はそれに悩み苦しんで自分で命を絶ってしまう人がいるのが現状です。いじめに苦しんでいる人はどれくらいいるのでしょうか。きっとすごく多いと思います。ニュースや新聞などでいじめについて取り上げられているのを見ました。

はじめは「いじめはたくさん起こっている」と言われても、実感がわかなかったけれど最近は本当にいろいろなところでいじめについての話や悲しいニュースを聞くので、いじめがたくさん起こっているという事実に対しては理解してきたと思います。

でも、いじめを受けている人や受けたことのある人はどんな気持ちなのでしょうか。相談もできず、一人でさみしくつらい思いをしているのだろうと僕は思います。どうすればそんな人を減らしていけるのでしょうか。

「いじめは人を傷付ける行為だからだめです」とか、「自分のことも痛めつけることになります。だからいじめをしてはいけません」と言っているだけではいじめは減っていかないと思います。いじめが原因で人が自殺したと聞いても、いじめている人には「自分たちがしていることはそこまでひどいことじゃない」とか、「もとはと言えば、あいつが悪いんだから自分は大丈夫だ」と感じてしまう人の方が多いような気がします。いじめている人にいじめをやめさせることは難しいと思います。

そこで、いじめている人を見つけてどのようにしていじめをやめさせるにはではなく、いじめられて苦しんでいる人を守るためにはどうすればいいか、それを考えるべきだと思います。僕たちが見つけるべきは、つらい思いをしている仲間です。声をかけたり話を聞いたり、誰かに相談したり、それがいじめてしまっている人のためにもなり、最終的にはいじめをなくしていくことにつながっていくのだと思います。

そのためには、自分自身も気を付けなければなりません。軽い気持ちで言ってしまったり、やってしまったりしたことが、相手にとっては心に残る嫌なことだったかもしれません。まずは自分の言動で嫌な思いをする人がいないように考えなければならないと思いました。

身の回りの苦しんでいる人に気づき、減らしていくこと、それがいじめに対する一番の解決策だと思います。

## 虐待された子供の未来

緑丘中学校三年

私は最近まで、児童虐待についてはあまり考えたことがなかったし、何も知りませんでした。テレビのニュース番組で、山に置き去りにされた事件などは見たことがあったけど、やっぱり自分

からは遠い世界のような気がしていました。
　三年生になって、私は図書館でとても目のひく題名の本を見つけました。その本の題名は『ｉｔ（それ）と呼ばれた子』で、私はその本に大変なショックを受けました。半分くらいまで読みすすめたときには、読まなければ良かったと思うほど残酷で苦しい内容でした。でも、なんとなく読まなければならないような気がしたので、最後まで読んでみることにしました。
　この本の内容は、仲の良くて幸せな、普通のどこにでもある家族が徐々に崩壊していくストーリーです。特にこれといった問題もなかったはずの家庭が母親の最悪なゲーム「虐待」の始まりにより壊されていきます。そのゲームの内容は、想像するだけで気分が悪くなるものでした。
　でも私はその本を見つけたことを後悔はしていません。虐待についてをより深く知ることができて良かったと思います。
　世界には、まだまだたくさん虐待を受けている子供たちがいます。その子供たちの親は、たいてい他の人たちにはバレないように虐めているし、それを「しつけ」として正当化している場合もあります。しかし、どんな理由があっても手を出してはいけないと思います。子供にもそれぞれの世界があり、その子供たちの心を虐待によって、暗くしてはいけません。そんな虐めを受けてきた子供が大人になって、また同じことをくり返してしまうことも少なくはないそうです。つまり、虐待を受けた子供は一生を棒に振ってしまうことがあるということです。そうならないためにも、周りの大人がその子供に気付いてあげることが大切です。力の弱い子供は親に抵抗することもできないし、親が怖くて周りの大人にも頼ることができないでいます。一人でも、その子にとって心のより所となる人がいてくれれば、とても心強く感じるはずです。ずっと親におびえながら過ごしていかなければならない、そんな不安だらけの生活を送るのは辛くて苦しくて、どうしようもないような暗い気持ちになると思います。その子供たちを少しでも助けるために、周りの人たちが手をさしのべることが必要です。何の罪もないこのような子供たちがこれ以上傷つけられないでほしいです。
　子供の頃に虐待を受けた経験を持っている人たちの中に、大人になってから同じような窮地に立たされている子供たちを救おうとしている人がいるということを知りました。私はそのような人たちを心から尊敬します。子供の頃、親からの虐待で散々辛い体験をした人たちが自分の子供にそれをくり返すことなく、助けようとしている姿に感動しました。虐待で苦しんでいる子供たちが少しでも多く解放され、明るい未来を生きられることを願っています。

## 愛のあり方

――城南中学校三年

　他人に愛されていない人間なんて世界中どこを探したって一人もいないと思います。家族、友人、学校の先生…一人一人が多くの人々に愛され、その人たちもまた多くの人に愛されています。人間はいつも他人の〝愛〟に支えられているのだと私は思います。
　私も今までたくさんの人に愛され、ここまで大きくなりました。その中で、一番私を愛してくれたのは、〝家族〟です。生まれてきた私に素敵な名前をくれて、ごはんを与えてくれました。楽しいときは一緒に楽しんでくれて、悲しいときはそばに寄りそってくれました。だめなことはだめと叱ってくれて、いいことをした

らたくさんほめてくれました。何があっても決して見捨てず、何度も何度も手を差しのべてくれました。

ですが、私は今家族になにか返せていることがあるのでしょうか。たくさん愛してもらった分、私からもたくさん愛せているのでしょうか。私の母はよく

「気持ちだけで充分なのに。」

と、いつもプレゼントをあげたときに言います。物は捨てない限り残るけど、気持ちは目に見えないし形にも残りません。だから小さい頃は「なんでお母さんは物より気持ちの方がいいんだろう。」と不思議に思っていました。でも、成長するにつれて、母の気持ちは自然と分かるようになっていきました。〝心のこもっていない物をもらうより、心のこもった気持ちをもらう方がうれしい〟母はこういうことが言いたかったんだ、と私は気づきました。気持ちは物のように形としては見えないけれど、表情と言葉で伝え、相手の心の中の記憶に残すことはできます。

例えば、恋人や友人にプレゼントをあげる場合。高級な車と千円のネックレスならば、どちらの方が喜んでくれるでしょうか。物として見ればもちろん車でしょう。ですが、千円のネックレスでも心がしっかりこもっていれば相手は喜んでくれるはずです。もちろん相手が自分は愛されていると思っているかも重要ですが、千円のネックレスをもらってもなお自分のことを愛してくれる人が本当に自分を思ってくれている人なのではないでしょうか。

同じように、生まれた時は元気で健康な子どもだったけれど、突然重い病気にかかり一生なおらないと医者に言われたとします。その時、親は変わらずその子どもを愛することができるのでしょうか。治療費がかかるからもう自分の思い通りの子に育たないから、色々な理由で子どもを見捨てる人が世の中にはたくさんいます。たとえ、それが病気ではない場合でも、言うことを聞かなかった、あるいは子どものせいでなくても、泣き声がうるさかった、仕事で疲れてイライラしていた、などの理由で殺害にまで至ってしまうこともあります。まだこれから、未来に希望がある子ども達を、自分の希望が実現できなかった大人達が台無しにします。

それは、あまりにも勝手すぎると思いませんか。今の大人達はたくさん愛をもらって立派になったのではないのですか。家族の愛に支えられ、つらいことも乗りこえてきたのではないのですか。なのに、どうして自分の子どもに、あなたが愛してもらったのと同じように愛し、その愛で支えてあげようと思わないのですか。

世界は愛で溢れています。ですが、愛の足りないところだってあります。しかし、愛そうという努力は誰にだってできるはずです。

私は、いつか世界中の人が百パーセント、百二十パーセントの愛で満たされる日がくることを望んでいます。〝人を愛そうと努力する〟これが愛のあり方だと私は思います。

## 「平和」を感じる

――熊野川中学校三年

私は今年五月、修学旅行で沖縄を訪れた。太平洋戦争で、日本で唯一地上戦が行われ、夥しい数の死者が出た地を訪れ、戦争がこの地でおよそ七十年前に起こったという信じ難い事実とそれの悲惨さを学び、改めて平和というものの尊さを感じるためだ。

私達はアブチラガマという所を訪れた。ガマとは洞窟のことを指し、戦争中の避難場所のような所だった。入った時の第一印象は、「暗い。」懐中電灯を持っていたので足下を照らすことはできたが、戦争中は懐中電灯も無いまま、こんな不安定な足場で、光

も差し込まず真っ暗な闇の中、いつアメリカ軍が自分達に気付くか分からない状況だ。こんな状態で、日本の勝利どころか、生きることに希望を持てたのだろうか。暗くて何も見えず、怖くて怖くて仕方のない生活を送っていたのではないか。

今の自分がいる環境は平和だと思う。しかし、その平和を時に「退屈だ」と思ってしまう自分もいる。それは、平和ではない環境を経験したことがないからだ。それはとても良いことだが、平和であることに感謝することを忘れる原因にもなる。

だからこそ、平和ではなかった環境を知る為に沖縄へ行き、少しだけでもそれを学び、今の自分達の平和な環境に感謝する。そういう思いで、辛く、痛々しく、酷い過去から目を背けずにいなければいけないと思いながら見学した。

それは、思った以上に辛く悲しいものだった。死ぬ為に戦場に行くようなものなのに、戦いの最前線に立たされた学生達や、軍に自害することを強いられた一般人、親や友達を失った子ども達。色々な人が苦しみ、それぞれ違った辛さを味わってきた。私達はその辛さを味わうことはない。味わってはいけない。でも、今回沖縄を訪れて、学ぶことが出来た。過去に起きた悲惨な戦争、それによりどれだけの人々が苦しみ、犠牲になり、辛い思いをしたかをもっとたくさんの人が知って、「平和」というものの大切さを知り、感謝すべきだと思う。平和というのは、家族や友達と心から笑い合える社会だと思う。だが、それ以前に、戦争があっては平和とはいえない。まだ世界には戦争をしている国があるが、私達の国はしていない。その為、「平和」というものへの意識が薄れているのではないか。

今回、日本の悲惨な過去を学ぶことで、平和だ、そしてそれは喜ばしく感謝すべきことなのだ、ということを改めて感じることが出来たと思う。

## 相模原殺傷事件で思ったこと

光洋中学校三年

先月二十六日、障害者殺傷事件がありました。その事件は、神奈川県相模原市にある知的障害者施設で入所者が刃物で刺され十九人が死亡、職員三人を含む二十七人が重軽傷を負った事件です。容疑者は、その施設の元職員でした。

そのニュースを見た時、私は恐ろしくて背筋が凍りました。と同時に、なぜこんな酷いことをするのだろうと思いました。

なぜその容疑者は施設の人達を殺害したのかを知るため、私はニュースを見たり、インターネットを使って調べてみたりしました。すると、その容疑者は障害者が嫌いで「障害者は社会的に不要な存在なので死ぬべきだ」という様な思想を持っていたようです。その事を知った私はこんな事を考える人がいる事が信じられませんでした。さらに調べていくと「知的障害者や重複障害者は一人で生きることが出来ず、税金で養ってもらっているのだから安楽死させるべき」というような容疑者の考えもありました。このような考えに共感していた人も少なからずいて、どうしてこんな考えに共感出来るのか分かりませんでした。それに、このような考えに共感する人にも腹が立ちました。

私の妹は発達障害があります。妹は小学校の特別支援学級に通っています。私はまさか自分の妹に障害があるだなんて思っていませんでした。だから、妹が小学校の特別支援学級に通うことになったと知った時はとても驚きました。

妹とはたまにロゲンカになる時があります。その時も普段話をする時も、私は妹に障害があるということを気にした事はありま

せん。妹と話をする時はどうすれば妹に伝わりやすく返事が出きるかということは考えます。でもそれは私が他の人と話しをする時も同じです。たまにロゲンカもするけれど妹はとても優しいです。

人は誰もが必ず誰かの手助けがなければ生きていけません。小学生や中学生はなおさらです。その子供達は親に育ててもらっています。施設の元職員の容疑者もそうだと思います。

一人で生きることが出来ない、税金で養ってもらっているのは私たちも同じです。だから私は、障害者だけが周りに迷惑ばかりかけているのではないと周りに知らせていこうと思います。世界中の人が周りに多少の迷惑をかけているということも同じように知らせていこうと思います。

それから、障害者殺傷事件のニュースを見て私はこの容疑者のような考え方をする人を絶対に許しません。どこの誰であろうと人の命は絶対に奪ってはいけないと今までよりもさらに深く思いました。

私は、このような事件があったことを一生忘れません。

それと、今日から妹ともっとたくさん話をしようと思いました。

私は社会的に立場の弱い人の味方でいたいです。